

2 環境保全交流推進事業

(1) 廃プラスチック海洋汚染対策シンポジウムの開催

ア 期 日 2000年7月26日
イ 場 所 北日本新聞ホール（富山市）
ウ 主催者 環境庁、
 (財)環日本海環境協力センター
エ 内 容

(ア) 開催目的

近年の海洋汚染は、油等の流出による汚染、浮遊性の廃棄物による汚染等が顕在化している。

なかでも、廃プラスチックは海洋汚染においても分解されにくいという特性から、長期間海洋中に存在するとともに、誤飲や絡み付き等により野生生物に被害を及ぼすなど、広域的に汚染がみられる。

このため、シンポジウムを開催し、廃プラスチックによる海洋環境汚染の実態把握とその防止対策の推進に努める。

(イ) プログラム

a 開会あいさつ

環境庁水質保全局
海洋環境・廃棄物対策室長
伊藤 哲夫

b 事例発表

座長
立命館大学経済学部
教授 藤倉 良

「日本海沿岸海辺の埋没物・漂着物調査結果について」

富山県立大学環境工学科
教授 楠井 隆史

「海上漂流物の実態について」

海上保安庁海上環境課
専門官 濱田 利之

「外国からの海岸漂着ゴミについて」

防衛大学校建設環境工学科
教授 山口 晴幸

「廃プラスチックによる海洋汚染防止対策検討調査結果について」

環境庁水質保全局
海洋環境・廃棄物対策室
室長補佐 島田 幸司

c パネルディスカッション

「プラスチック等漂流漂着物からの海洋環境保全に向けて私たちに今できること」

コーディネーター
立命館大学経済学部
教授 藤倉 良

パネラー
事例発表者及び
クリーンアップ全国事務局
代表 小島あずさ

d 閉会あいさつ

(財)環日本海環境協力センター
専務理事 折谷 雅實

(2) 国際環境協力推進会議の開催

ア 期 日 2000年8月2日
イ 場 所 富山国際会議場
ウ 主催者 (財)環日本海環境協力センター
エ 内 容

(ア) 開催目的 今後、地方自治体が国際的な環境保全に関する協力を実施していく上で想定される問題点等を把握し、国際環境協力を効果的に進めるためにこれまでに国際環境協力に携わってきた体験者等から事例等の紹介を受け、会議参加者により、意見交換を行うことを目的とする。

(イ) プログラム

a 開会あいさつ

(財)環日本海環境協力センター
専務理事 折谷 雅實

b 講演

「中国との環境協力の現状と課題」
環境庁企画調整局地球環境部
環境保全対策課環境協力室
室長補佐 大村 卓

「中国の交渉スタイルと日中異文化コミュニケーション」

株式会社梶田中国総合研究所
代表取締役 梶田 幸雄

c 事例発表

「無錫市における合弁処理浄化槽の共同試験研究」

アムズ株式会社技術開発部
部長 宮本 涼一

「中国遼河上流部における水質共同調査について」

(財)環日本海環境協力センター
地域活動センター

調整専門員 白山 肇

d 総合討論（意見交換、質疑）

(3) 「北東アジア地域自治体連合環境分科委員会」の推進

ア 経緯

「北東アジア地域自治体連合」は、北東アジア地域における多地域間の交流、協力を積極的、円滑に推進するために、日本海を取り巻く日本、中国、韓国、ロシアの自治体による北東アジア地域自治体会議において提唱され、環日本海地域の自治体を中心となって1996年9月に韓国慶尚北道で開催された会議で設立された。

また、1998年10月に「北東アジア地域自治体会議'98」において、北東アジア地域自治体会議で提案された個々の個別プロジェクトあるいは課題について、その円滑な推進を支援するため、5分野の分科委員会（経済・通商、文化交流、環境、防災、一般交流）の設置が決定された。

なお、1999年7月に、初めての「北東アジア地域自治体連合環境分科委員会」が開催され、本分科委員会の中心となり連絡、調整、運営を行うコーディネート自治体として富山県が選出された。

イ 環境分科委員会の目的

環境に関する個別プロジェクトの円滑な実施を図るため、自治体間の意見調整、事業計画の具体化及び実現方策等について、検討、協議等を行う。

ウ 参加自治体（環境分野に関心を有し、環境分科委員会に参加を希望した自治体）

16自治体（日本8、韓国1、ロシア7）

日本（青森県、新潟県、富山県、石川県、福井県、京都府、兵庫県、島根県）

韓国（忠清南道）

ロシア（ブリヤート共和国、サハ共和国、沿海地方、ハバロフスク地方、アムール州、イルクーツク州、サハリン州）

エ 事業概要

(ア) 会議の開催状況

a 第1回環境分科委員会

(a) 期 日：1999年7月

(b) 開催地：富山県

(c) 参加自治体：19自治体

（日本9、韓国4、ロシア2、中国3、モンゴル1）

(d) 会議内容

- ・コーディネート自治体の選出
- ・環境協力の推進方策について検討し、個別プロジェクトの調査（提案調査、参加意向調査）の実施決定

b 第2回環境分科委員会

(a) 期 日：2000年8月

(b) 開催地 富山県

(c) 参加自治体：15自治体

（日本8、韓国2、ロシア5）

(d) 会議内容

- ・1999年に提案された個別プロジェクトの実施状況報告
- ・環境分科委員会の運営について確認・決定（環境分科委員会の毎年開催を決定）

(イ) 個別プロジェクトの実施状況

1999年の第1回環境分科委員会において、個別プロジェクトの実施を決定し、実施にあたり各種調査を行うこととなった。

この結果を受け、2000年については14の個別プロジェクトの提案があり、このうち次の4個別プロジェクトが実施された。（このうち1個別プロジェクトについては、途中で中止）

実施個別プロジェクト一覧表

個別プロジェクト名	提案自治体	参加自治体等	備考
日本海沿岸の海辺の埋没・漂着物調査	富山県	日本13 ロシア3	
北東アジアとの渡り鳥に関する共同調査	富山県	ロシア1	
北東アジア環境評価共同事業	新潟県 富山県 石川県 兵庫県	日本8 中国9 韓国8 ロシア7	共同提案
北東アジア野生生物調査事業	島根県	日本1 韓国1 ロシア3	中止

(4) 「環境実務協議団」の派遣

- ア 派遣先
韓国江原道
- イ 派遣期間
2000年11月13日から17日まで
- ウ 派遣者等
富山県生活環境部
参事・環境政策課長 三田 哲朗
環境保全課水質保全係長 笹島 武司
- 随行者
(財)環日本海環境協力センター
調査研究課係長 中川 秀幸
- エ 派遣日程
実務協議団の日程は、次のとおりである。

派 遣 日 程

月 日	内 容
11月13日	・富山空港発一金浦空港着 ・(財)自治体国際化協会 ソウル事務所訪問
11月14日	・江陵市下水処理場視察 ・鏡浦海岸等視察 ・(社)江原環境研究所訪問
11月15日	・五台山国定公園を見学 ・江原道環境政策課と協議
11月16日	・江原道環境政策課と協議 ・ソウル市へ移動
11月17日	・金浦空港発一金浦空港着

- オ 協議内容等
- (ア) 社団法人江原環境研究所との協議
- a 出席者
(社)江原環境研究所
理事長 李 奉模
所 長 (関東大学校環境工学科教授) 李 承穆
江原未来研究所
理事長 崔 旭澈
- b 協議内容
富山県から「日本海沿岸海辺の埋没・漂着物調査」に関して、韓国においては(社)江原環境研究所を核としたNGO活動としての調査参加を要請した。これに対して、(社)江原環境研究所より、対岸との関係については、相互協力の必要性を感じており、実現出来るように努力したいと考えているとの回答があった。
また、今後、(社)江原環境研究所と

(財)環日本海環境協力センターとは、NGO同士としての交流を行っていきたいと考えているとの発言があった。

- (イ) 江原道環境政策課との協議
- a 出席者 (江原道)
環境政策課長 宋 丙瑛
環境政策課自然環境担当事務官 金 永杓
環境政策課環境政策担当事務官 洪 性春
環境政策課 孫 媛圭
きれいな水保全課長 咸 大植
きれいな水保全課水質保全担当 文 南洙
国際通商協力室
アジア・アフリカ担当事務官 崔 炯奎
国際通商協力室日本担当 鄭 京姫

- b 協議内容
河川の水質調査体制、地下水対策、工場施設の水質検査、オキシダントの測定、人工ダムのヘドロ対策、富山県の環境影響評価について情報交換を行った。

北東アジア自治体連合環境分科委員会について説明し、参加を要請した。また、NEAR環境分科委員会に個別プロジェクト等についての質疑応答を行った。

江原道より、海辺の埋没・漂着物調査に参加する場合、以前から国の制限があり、このことについては、今後も国と相談したいとの発言があった。

2001年度の環境実務協議団の相互派遣については、江原道からの環境実務協議団を富山県が受け入れることにし、多岐にわたる資料の交換を行うことが協議された。

(5) 各種会議への参加

各種会議への参加のうち、主要なものは次のとおりである。

- ア 地球環境研究総合推進費公開シンポジウム
－海洋と生物多様性の“今”；地球の“未来”を考えよう－

(ア) 期 日 2000年10月3日

(イ) 場 所 国際連合大学

(ウ) 主 催 環境庁

(エ) 内 容

● 第1セッション：海洋汚染を考える
プレコメント

学校法人トキワ松学園

理事長 平野 敏行

「有害化学物質の海洋汚染を地球規模
で測る」

環境庁国立環境研究所

功刀 正行

「アジア沿岸海域の健康度とシリカ欠
損問題」

環境庁国立環境研究所

原島 省

「海は徐々に変わるのか、それとも突
然変わるのだろうか」

北海道大学大学院

地球環境科学研究科 角皆 静男

「黄河と長江の沿岸域における環境問
題」

通商産業省地質研究所

斎藤 文紀

「長江流域からの環境負荷と海洋生態
系への影響」

環境庁国立環境研究所

渡辺 正孝

● 総括コメント

「海洋汚染」研究10年と今後の課題

学校法人トキワ松学園

理事長 平野 敏行

● 第2セッション：生物多様性の保全
を考える

プレコメント

(財)自然環境研究センター

理事長 大島 康行

「渡り鳥から見た湿地と生物多様性の
保全」

国立環境研究所 田村 正行

「ロシア北方林で生物多様性を考える」
北海道大学大学院農学研究科

高橋 邦秀

「保全生態学からのコメント」

東京大学大学院学生命科学研究科

鷲谷いずみ

「サンゴ礁に生物多様性を見る」

水産庁西海区水産研究所

澁野 拓郎

「野生生物が絶滅するメカニズム」

環境庁国立環境研究所

椿 宜高

● 総括コメント

「地球環境保全に資する生物多様性研
究の現状」

九州大学名誉教授 小野 勇一

イ 第24回相模湾の環境保全と水産振興シン
ポジウム

(ア) 期 日 2000年10月5日

(イ) 場 所 小田原市役所7階大会議室

(ウ) 主 催 水産海洋学会

(エ) 内 容

● 講 演

「相模湾の海底地形と潜水調査」

海洋科学技術センター研究業務部

海務課 赤澤 克文

「相模湾の海水特性と栄養塩・プラン
クトン」

東京水産大学海洋環境学

杉山 優治、石丸 隆

「深層水とは何か」

東京大学大学院総合文化研究科

高橋 正征

「深層水の水産業への利用の現場と今
後の方向」

海洋科学技術センター

中島 敏光

● 総合討論

座 長

学校法人トキワ松学園

理事長 平野 敏行